

＜議事録＞

第13回「東日本大震災 子ども・学校支援チーム」会議（案）

日時：2014年3月15日（土）14:00－16:15

場所：学校心理士認定運営機構事務局

出席者：11名

《敬称略》石隈（会長）・大野（常幹）・我妻（北東北）・藤岡（京都）・小澤（千葉）・西野（宮城）・
西山（福岡）・瀧野（大阪）・氏家（宮城）・山口（茨城）・都丸（書記）

資料：資料1-12

※巻末：資料名一覧参照

＜＜会議概要＞＞

I. 会計報告：被災地支援に関わる予算について（大野常任幹事）

II. 現況報告

1. 福島県（石隈会長）

- （1）福島支部研修会報告
- （2）福島県の学校心理士をめぐる現状

2. 宮城県（宮城支部：西野支部長，氏家氏）

- （1）近況報告
- （2）ケア・宮城について
- （3）今後について

3. さくらサポート（小澤氏）

- （1）支援の報告
- （2）これまでのふりかえり
- （3）支援内容について

4. 岩手県（北東北支部：我妻支部長，京都支部：藤岡支部長）

- （1）報告：国際森田療法学会
- （2）沿岸部での直接支援
- （3）未来へ向けての予防
- （4）岩手県教育研究会参加報告

5. 茨城県（茨城支部：山口支部長）

III. まとめ，他

- 1. 『大規模災害に伴う子どものメンタルヘルスサポートプロジェクト（広報案）』
- 2. 本会議のまとめと今後の会議日程

＜＜巻末：資料名一覧＞＞

I. 会計報告：被災地支援に関わる予算について（大野氏）

1. 予算について

寄付金残金：約 190 万円

今後：学校心理士会および学校心理士認定運営機構の予算から被災地支援のための新たな項目として捻出

課題：募金対象期間は 3 年間→現時点で多額の寄付金が未使用→より効率的な予算執行の必要性

2. 最近の支出

福島支部で研修会用の小冊子を作成

※資料 1 参照

（本冊子は個人情報を含むため、「取扱い注意」の記載の元、限定された範囲で配布された）

3. 検討事項：今後の支出について

①仙台で開催予定の研修会に、オーストラリアから災害支援の専門の先生を招へいする際の諸費用

②岩手支部より（我妻支部長）

2013 年度学校心理士合格者の中に、大槌町の小・中学校の先生および陸前高田市の高校の先生等、4 名ほどが含まれていた→彼らと連絡を取り、沿岸部でのコンサルテーションや連絡協議会等、当該の地域に赴き、何らかの関わりを築こうと考えている。その件に関わる諸費用として。

③宮城支部より（西野支部長）

※資料 4 参照

今後、震災後に開催された研修での聞き取りの内容をまとめることを予定している。聞き取り対象は、学校心理士および学校関係者であった。単に「記録」のみではなく、今後役に立てられるように内容の検討を行う。7 月中に印刷が完了するように準備を進めている→印刷費および陸前高田市との連携に関わる諸費用として。

II. 現況報告

1. 福島県（石隈会長）

（1）福島支部研修会（2014 年 3 月 1 日開催，共催：福島県教育委員会）報告

①構成

午前…基調講演（石隈会長）

午後…シンポジウム：「震災から 3 年。子どもとともに歩む学校心理士の課題」

②参加者

多くの参加者（県の教育委員会から幹部の先生方も出席）

③資料 1 ※当日配布

鈴木康裕先生（福島支部，福島大学所属，学校心理士 SV，専門分野は SW）を中心に，編纂。福島県内ほぼ全ての学校心理士の記録を収録。

学校心理士幹事および執筆者にのみ配布（自己開示に関わる内容・固有名詞の記載より）。

④現状報告

例) 双相地区沿岸部→現在…Wの課題 (危機直後の課題+中長期の学校教育の課題)

- リターニー8割 (内6割は仮設住宅, 4割は借り上げ住宅)
- 賠償金の多少の問題→働かないことを選択する大人たち
- 心身ともに疲弊する子どもの存在

福島市内→一見落ち着きを取り戻した様子。しかし, 放射能や中・長期的な放射能への対策に関する不安を抱えて生活する大人と子ども。

⑤確認事項

(※今回, 研修会開催に当たっては, 福島県から初めて依頼があった)

*震災後から現在まで, 学校現場での日常生活・学校生活支援が非常に重要であったことの確認

*福島県の学校心理士会として今後, 積極的に支援活動を行いたい決意の確認

⇒学校心理士会東京支部との協調を視野にいれて

*卒業式の日程と重なった3月11日をどう過ごしたらよいかの確認 (行政の先生からの質問)

ポイント1 「アニバーサリー」と「卒業式」の二つの点に配慮しつつ, ゆっくり準備を進める

ポイント2 前後のケアに配慮

ポイント3 震災後3年間でできたことを子どもたちが表現できる機会を設ける

(2) 福島県の学校心理士をめぐる現状

*福島県支部所属の学校心理士の先生は, SSWの割合が高い

背景: 福島大学心理学部→臨床心理士養成, 教育学部→学校心理士養成 (鈴木康裕先生所属)

*鈴木康裕先生…教育委員会との強いつながり, 子どものこころのサポート協議会委員 (SW代表)

⇒次回以降, 子ども・学校支援チームへの参加を予定

今季夏に開催予定の士会大会 (in 文教大学) にて, SVを対象とした研修を担当予定。

*内山登紀夫先生 (福島大学教授, 精神科医) …文科省の許可を得, 被災関連の支援室を大学に設置。学校心理士と連携を取りやすい雰囲気→今後ネットワークの構築を!

2. 宮城県 (宮城支部: 西野支部長, 氏家氏)

(1) 近況報告 (氏家氏)

①新聞報道記事から

※資料3-1~3-5参照

震災の年に高校へ入学した子どもたちは, 仮設の校舎で3年間を終え, 今年度卒業年度であった。

②個人的な出会いから

2月末, 石巻市の湊小学校 (さくらサポートが支援していた学校) に勤務している小学校以来の同級生と, 震災後初めて会える機会があった。

【さくらサポートの行った支援に対して (被支援者の視点から)】

*さくらサポート: 黒子に徹した支援→湊小の先生方: 人を信頼することができた

*さくらサポートへの感謝の気持ちが語られた (先生という職をこれから先も丁寧にやりたいと思えるような支援だった。これから先も教師を続けていきたいと思えた)

(2) ケア・宮城について (西野支部長)

※資料4参照

①活動報告

昨年度（3年目）：教育委員会と提携して宮城県下の学校の研修に呼ばれた（20回）

※来年度も継続して実施予定

沿岸部と内陸部、また研修対象となる先生の立場によって支援ニーズが異なる

②講演報告

アメリカからハリケーンカトリーナを経験した社会学者の先生を招へいし、講演会を開催した。

③調査報告

内容：震災後の子どもたちの様子（身体症状、心理的反応、外的な行動）について（2011、2012年）

対象：宮城県下の養護教諭（無記名）

時期：2013年9月ごろ

結果：身体症状および心理的反応は減少、外的な行動は増加

身体症状⇒頭痛・腹痛・下痢…減少，肥満・皮膚疾患・怪我骨折…増加

心理的反応⇒不安・恐れ…減少，集中力欠如・情緒不安定・気分のむら・落ち込み…増加

外的な行動⇒初年度に比較し、全体的に増加

※上記の結果等を踏まえ、今後の研修内容について検討する必要がある

（3）今後について

①フェーズとフェーズの狭間の今、何をしたらいいのか？何ができるのか？（氏家氏）

被災の事だけに焦点を当てると、「過去」「いつまでも引きずる…」に移りつつなってしまう。しかし、被災のことを抜きにしてしまうと、「まだ被災は終わっていない」となる。

※次に来るフェーズに、私たちがどのような姿勢で対峙したらよいかの間問われている。

例）「津波からの非難の手引き」（資料5参照）→避難所と記載された場所は震災時に水没した場所…

例）3月11日は「みやぎ鎮魂の日」→学校によって休校。高校および沿岸部の学校は休校にするところが多い→休校にならない学校及び地域→意識の差異が生じている

（4）報告を受けて

①良質な支援の在り方とは？～さくらサポートの支援を受けた先生の話を受けて～（大野常任幹事）

「必要不可欠な支援＝良質な支援」ではあるが、「支援＝やってあげること」とは違う。

⇒良質な支援の在り方とは何かという課題が提起された

②落ち着きがない子どもたちの背景

・石隈会長より：幼児期の被災経験への不十分なケア，落ち着かない環境，親からのサポート不足（保護者自身の困難かつ余裕のない状況）

⇒発達障害の様な行動を示す子ども，発達障害が顕在化しやすくなっている子ども

・小澤氏より：学校での子どもたちの様子は，震災後と比較すると，とても落ち着いてきた

その揺り返しが，学童や家庭でみられる落ち着きのなさに関連しているのでは？

・我妻支部長より：岩手県のある先生から聞いた話

〔震災後1，2年目：子どもたちは緊張し，それなりに行動

〕〔震災後3年目：緊張が切れ，子どもたちの行動が緩んできた

※拝啓：未だに復興の進み具合が中途半端な被災地の状況

課題：成長面している側面と落ち着かず不安定な側面が混在している

⇒子どもたちの様子は一面だけ見てもわからない地域（地元 4/1，仮設 4/1，借り上げ 4/1，

親せきの家 4/1) と場所 (学校, 家庭, 学童…等) 等加味し, 総合的に判断する必要がある。

③ケア・宮城の活動の成果

- * 県全域で行政と関わりながら, 各専門家の横断的結集を図った活動としてのモデル
- * WHO の危機ケアに関する印刷物を刊行して配布 (3 万部)
- * 印刷物, 研修会に関わる講師の旅費, 等←資金調達は NGO から (国内の NGO が国内支援の活動に従事した初の例 ←なお, 南海トラフに備え支援のニーズと授受の取りまとめを目的とした NPO・NGO の組織化も現在進んでいる)

④学校版 DMAT について (瀧野氏)

宮城教育大学が学校版 DMAT を設立?

⇒兵庫県と連携のもと, 学内の教育復興支援センターに事務局を置き, 設立を進めている

内容: 教育復興支援センターで研修を受けた先生でチームを組み被災地に向かう

教訓や経験を集積⇒研修へ活かす

想定されている災害は自然災害だけではない⇒未だ詳細は不明

3. さくらさぽーと (千葉支部: 小澤氏)

※

資料 6 参照

(1) 支援の報告

2014 年 3 月 7 日が, 3 年間の支援の最終日であった。湊小は, 今後別の小学校等統合されて, 新しい校舎へ移るため, 支援の区切りのタイミングであると判断した。

(2) これまでのふりかえり

①支援の日程

4 月 5 日: 宮城県へ→県の教育長, 教育委員会への挨拶

4 月 6 日: 石巻へ

初年度: ほぼ毎週, 月・火・水に支援に向かう (合計 44 回)

次年度: 学校からオファーがあった時のみ支援に向かう

(合計 6 回⇒ストレスチェック, 取り出し面接, 学校行事への参加)

次々年度: 次年度と同様のスタンスで支援を継続

②支援に関わった人々

コア・メンバー, 退職教員, 現職教員, 千葉大学の学生, 院生, 計 45 名

※延べ人数のカウントの仕方に関しては要検討事項

③支援内容

当初: 避難所へ支援物資を運搬, 避難所での支援物資の仕分け

5/8: 支援場所を学校へ。授業の手伝い等, 黒子に徹した支援を行う (原則: 要請を受けての活動)

☆目標=先生方の負担軽減

⇒学級支援の要請を受け, 学級に入ったことをきっかけに支援の活動が教育へと広がる

2 年目終了時: 被災地支援というよりも, 通常の学級支援へと支援内容が移行してきた印象

⇒さくらサポートの活動の終焉を検討

※さくらサポートの記録は, メンバーの一人である関根先生によって毎回詳細になされており, 電

子ファイル化されている（1年目分に関しては、既に冊子化し、メンバー間で共有）。

④課題

活動を始めた年度の夏に開催された学校心理士会でのシンポジウム発表時に示した「課題（『学校心理士への提言』のスライド **※資料5参照**）」は、現在も継続している。

（3）支援内容について

①支援物資に関わる困難

- ・震災後：支援物資の格差…メディアに報道される場所には、全国から大量の支援物資が送られてくるが、報道がなされない場には、ほとんど支援物資が届かない
- ・震災後～現在：善意で各地から大量に送られてくる支援物資
⇒子どもたちに配るまでの作業が甚大（マンパワーが必要）⇒被災地での負担に
- ・必要なものは足りているが、不足なものはいつもある



支援物資に関する上記の課題を改善すべく…

「つなぶろ」（被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト **※日本財団の支援を受けて設立**）

②先生方の話を聞く機会

- ・初年度はほとんどなし。しかし、徐々に折に触れて先生方の話を聞くことも。

③ボランティアについて

- ・支援を通して、学校側と上手くいかなくなるボランティア団体もある
- ・原則は、ワンステップダウン！
「さくらサポートボランティアの心得～よい子のお約束～」の確認（最終支援まで継続）
- ・ボランティアを行うに当たっては、ボランティアを行う側のメンタル面が問われる
- ・支援最終日、「ボランティアに感謝する回」が開かれた（4つのグループに対して）

（4）報告を受けて

①さくらサポートに感謝の言葉が送られた件について（石隈会長）

3年を経、大変さは現時点においても継続しているが、同時にちょっぴり振り返ることができるようになってきた証としての「感謝の言葉」（ポイント：周囲から促されての感謝の言葉ではない・人を通して間接的にでも「伝えたい、伝えてほしい」言葉）

②危機支援における外部からの支援について（石隈会長）

前提：外部から当該地域に入った支援者は、どこかの時点で当該地域を離れる
したがって…地域の資源の活力を奪わないためにも、黒子に徹することの意味は大きい

③支援物資について（石隈会長）

支援物資の配布に躊躇⇒「子どもたちに、もらい癖をつけてはいけない」（先生方）

※昔からの大人の知恵であり、危機支援における覚悟でもある
参照）ネイティブアメリカンへの多額の補償による問題（ドラッグ等の不適切な金銭の消費および働く意欲の喪失）の発生

③初年度3、4か月を経た後に挙げられた課題が現時点でも継続課題であることについて（瀧野氏）

提言に記載された課題＝「枠組み」「視点」

※具体的な活動や事例に関する課題は、月日を重ねるにつれ、その時々で変動している

(5) 宮城県・さくらサポートの報告を受けて：支援の総括について

- ・震災後 3 年が経過した今、これまでの活動や体験した事柄の記録をまとめ、総括および留意点の検討をすることによって、今後につなげていく必要がある。(茨城支部：山口支部長)
- ・被災 4 県でなされた支援の在り方を要約していくことで、**学校心理士が被災地支援にあたる際の原則**を見出すことが可能であろう (大野常任幹事)
《原則の明示⇒必要な研修の設定，装備のガイドライン，組織の構築⇒**学校心理士の公益性へ**》

4. 岩手県（北東北支部：我妻支部長，京都支部：藤岡支部長）

※資料 8 参照

(1) 報告：モスクワでの国際森田療法学会（我妻支部長）

トラウマケアについてのシンポジウムに参加

〔1 番手…緊急事態庁 2 番手…我妻支部長

〕3 番手…ウガンダのフチ族の虐待ケアについて 4 番手…チェルノブイリの心理ケアについて

発表内容：震災後の、日本の森田療法学会の対応及び開催した研修の内容について

⇒森田療法の PTSD に対する治療の概略の説明

*印象に残っている点

チェルノブイリに関する発表にて…心理的な懸念事項は生じていない（疑問あり）

知的障害者の発生増加（統計データより）

⇒背景：避難所におけるアルコール問題⇒胎児に影響

今後、さらに緊急事態庁主催の学会に参加予定

(2) 沿岸部での直接支援（我妻支部長）

学校心理士に合格した大槌および陸前高田に配属された先生方とのコンサルテーションを予定

(3) 未来へ向けての予防（我妻支部長）

提案：子ども・学校支援チームから積極的に、首都直下地震や南海トラフに向けた、年度大会や各支部での研修会実施呼びかけ

(4) 岩手県教育研究会参加報告（藤岡支部長）

※資料 8 参照

①「こころのサポート推進について」（沿岸南部教育事務所 指導主事）から

子どもたちに深刻な事態が起きている

【特記事項のみ抜粋】

- ・小 3，中 3 の児童生徒の不安定
- ・保護者対応の複雑化
- ・教職員の現状：震災体験を経験した教員と経験していない教員間に生じる問題
- ・心のサポート体制（子ども）：キャリアカウンセリング（「治す」から「育てる」へ）
- ・心のサポート体制（教員）：課題＝被災経験をどのように語り継ぐか？
- ・中・長期的対応における，SSW の役割へも注目
- ・幼少期の課題を抱えた状態でのサポート対応⇒進路先への移行支援

②「生徒の意欲回復を目指して」（大船渡市中学校所属の教員）から

子どもたちの抱えている課題と，学校で行ってきた対応（個別・全体支援）について

特に気になった点は「大人のサポートはいつも後回し」という点

③「命を守る防災教育の実践」(大槌町立大槌小学校)から

※4校が1校へ統合予定

- ・ストレスへの対応
- ・地域による温度差
- ・風化とどのように語り継いでいくのかという課題

④『教育』3月号の特集(「3・11 3年目を生きる」)記事の紹介

* 県教育委員長と岩手大学教育学部長との対談⇒岩手県の抱えている様々な課題に触れている

* 福島市内保育園園長⇒放射能問題が保育園に与えた影響について

* 福島県浪江町内小学校校長⇒「ふるさとなみえ科」の実践紹介

☆ 福島の放射能に関わる問題は、日本国内での情報量格差が甚だしい

(5) 報告を受けて

* 福島の原発問題について(氏家氏)

学校心理士が当該の問題にどのように向き合うかの哲学を作っておく必要がある

日本国内、東北内での温度差を感じる

5. 茨城県(茨城支部: 山口支部長)

* 潮来, 神栖市あたりでは…震災時に壊れた建物, 道路の改善が進んでいない

⇒子どもたちに影響?(当該地域における子どもたちの荒れ, 高校進学における低い倍率)

* スクールカウンセラーSVとして, 上記の点を考慮したSC支援を行いたい

Ⅲ. まとめ, 他

1. 『大規模災害に伴う子どものメンタルヘルスサポートプロジェクト(広報案)』について(石隈会長)

※資料7参照

検討事項

ジャスティン・ケネディ氏(オーストラリア, クイーンズランド大学所属)の招へいについて

【内容】

大規模災害に伴う子どものメンタルヘルスの維持・改善のための教師やその他の学校教育関係者等を対象としたプログラム(日本語訳済)の紹介

【資金, 等】

資金…支援チームの基金よりねん出(※交通費は, 千葉大学)

構成…ジャスティン・ケネディ氏, 小泉福岡支部長, 西山氏で検討

印刷等の事務的支援…学校心理士会

会場…仙台⇒宮城支部

【プログラムに関して】

* 瀧野氏より

※1年～2年半前、心理臨床学会にもプログラムの使用に関するオファーが来ていた

《その際に検討された点》

- ・日本語訳がきっちりしている
- ・重要なポイントは押さえられている
- ・我々が既に有している資料と比較し、特に新しく見いだせる点や視点はない
⇒研修を実施しても既存の内容と重複するのではないかとの懸念
- ・オーストラリアの援助資源を日本に置き換えている
⇒課題：誤ってはいないが、具体性（深さ）に欠ける

*西野支部長より

- ・宮城県で子どもたちの問題が懸念されているので、良いタイミングである

*石隈会長より

- ・渡航旅費は不要（謝金および東京からの交通費のみ）の為、おさらいとして勉強させてもらう

2. 本会議のまとめと今後の会議日程

今後のポイントとしては、「被災状況の日常化」が挙げられるのではないだろうか（大野常任幹事）

※本会議より得られた論点については、各県の現況報告について検討する中で既出済

【今後の会議日程】

第1回 5月24日（土）15時～17時

第2回 8月29日 16時～18時 ※学校心理士会大会（文教大学）前日
（11, 12月の開催については、後日検討）

第3回 3月14日 14時～

《巻末：資料名一覧》

- 資料 1：「第12回 支援会議議事録」
- 資料 2：日本学校心理士会・福島県支部編（2014）. 震災から3年 子どもたちのしあわせを問いつづけて
—私たちがたどってきた足跡—
- 資料 3：新聞報道資料（氏家氏より：いずれも河北新聞）
『被災幼児 33%PTSD 症状』
『被災遺児支える拠点 あしなが育英会・仙台レインボーハウス完成 5月から本格活動展開』
『大川小津波災害 石巻市「再発防止に生かす」検証委員が最終報告書提出』
『これから—大震災を生きる第18部 それぞれの春①女川高校最後の3年生 生徒会活動通じ成長』
『希望胸に宮城農高で卒業式』
- 資料 4：「表1 2013年度教員等の心のケア研修会（県義務教育課から依頼の研修会）（西野支部長より）
「震災発生以降、学校でみられた子どもたちの症状」（2011年度と2012年度の比較）
図8 学校でみられた子どもたちの症状（のべ症状数）
図9 学校でみられた子どもたちの症状（身体症状）
図10 学校でみられた子どもたちの症状（心理的反応）
図11 学校でみられた子どもたちの症状（外的な行動）
「東日本震災時における学校心理士の活動記録 宮城の場合」
- 資料 5：「津波からの非難の手引き」（氏家氏より）
- 資料 6：「さくらサポート支援の報告」（小澤氏より）
「学校心理士への提言」
- 資料 7：「大規模災害にともなう子どものメンタルヘルスサポートプロジェクト」
- 資料 8：「The echo of Fukushima: The after-effects of traumatic events and ahock experience」
（我妻氏より）
- 資料 9：平成25年度 岩手県教育研究発表会 こころのサポート分科会資料（藤岡支部長より）
「こころのサポートの推進について（沿岸教育事務所）」
「生徒の意欲の回復をめざして～震災後のこころのケアを通して日常の関わり方を見直す～」
「命を守る防災教育の実践～避難訓練・防災学習の取組を通して～（実践的防災教育総合支援事業）
大槌町立大槌小学校」
- 資料10：『教育』（2014年3月号）より抜粋（藤岡支部長より）
八重樫勝・新妻二男（2014）. 特集1 3.11 3年目を生きる⑥岩手 岩手の現状をどう見るか県教育委員長と岩手大学教育学部長に聞く 教育, 35-42.
石井賢一（2014）. 特集1 3.11 3年目を生きる⑦福島 なみえで学び なみえで教え なみえを考える 「ふるさとなみえ科」の実践で子どもを育む 教育, 51-63.